

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十六年八月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

(通第三八六号)

慈

光

第三十三卷 第八号

次

親鸞聖人の常の仰せ……………	(1)
懺悔録……………近角常観……………	(2)

信
仰
筆
錄
……
近
角
常
音
……
(8)

歎異抄愚註あとがき……………木村雄吉……………(12)

御一代記聞書抄…………井上善右衛門…………(14)

目凡骨日誌抄(12)……西元宗助……(17)

念
仏
詩
抄
……
木
村
無
相
……
(20)

法然聖人の徳音……花田正夫……(23)

62.8.12
◎
あふゆき
岩壁の如
境況せい

親鸞聖人の常の仰せ

○ 聖人の常の仰せには「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、今また案ずるに善導の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没み常に流転して、出離の縁あることなき身と知れ」という金言にすこしも違わせおわしませんが、さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が身の罪惡の深きほどをも知らず、如来の御恩の高きことをも知らずして迷えるを思いしらせんがために候いけり。

歎異抄、総結文。

○ 常の御持言には

「我はこれ賀古の教信沙弥の定なり」

と云々。しかれば締を専修念仏停廢の時の左遷の勅宣に

よせまして、御位置には愚禿の字を載せらる。これ即ち僧に非ず俗にあらざる儀を表して教信沙弥の如くなるべしと云々。これによりて「たとい牛盗人といわるとも、もしは善人もしは後世者もしは仏法者と見ゆる様に振舞うべからず」と仰せあり。

○ 改邪鈔 三章。

又つねに門徒に語りて曰く

「信謗共に因となつて、同じく往生浄土の縁を成す」

と。誠なるかなや斯の言、疑う者も必ず信を執り、謗る者も遂に情をひるがえす。まことにこれ仏意相應の化導、そもそもまた勝利広大の知識なり。惡時惡世界の今、常没流転のやから、若し聖人の勸化をつけたてまつらずんば、いかでか無上の大利をさとらん。

報恩講式 三項。

懺悔録

懺悔録序

如来は一切の為に常に慈父母と作りたまへり
当に知るべし諸の衆生は 皆是如来の子なり
世尊大慈悲 衆の為に苦行を修したまふこと
人の鬼魅に著せられて 狂乱所為多きが如し

是阿闍世王大煩悶に陥り、仏陀の大慈悲に接したりし時、
仏徳を讃嘆したる涅槃経偈頌の句であります。回顧せば、
私が苦悶した時、父が心配して「自分は老年であるゆえ、
代れるものなら代りて遣りたい」と云われたる言は、恰も
頻婆娑羅王が空中より阿闍世王に告げ導かれたる言の如く
思われます。又私が病熱に悶え苦しんでいた時、母が心配
して少しも眠らず、日夜看病して下さったことは、韋提希
夫人が冷葉を以て、阿闍世王の瘡に塗られたと全く同様に
感じます。「生育我身大悲母 西方教主弥陀尊」といえる
古聖の言は、今更の如く身に浸みます。確かに父母は此世に

近角常観

現われ給いたる仏陀の慈悲であります。仏の慈悲に接した
る多くの人々に於いて、常に父母の導きと親しき関係にあ
ることを発見いたします。実に親は子の為めに自己を捨て、
或は慰め或は戒め、種々苦勞して下さるが如く、仏陀は私
の為に永劫の昔より、一念一刹那も慈悲の眼を放ち給わず、
人が心配して気が狂う程に苦勞下さった御蔭で、漸く仏陀
の御慈悲が分ったのであります。

「弥陀の五劫思惟の御苦勞をよく／＼案ずるに、ひとえ
に親鸞一人が為なりけり」とは、実に仏陀の大親に気がつ
いた心中をよく言い顯わして下さった。今から思えば苦悶
や病氣は勿論、生れてから今日に至るまで一として仏陀の
深き御導きならぬはなかつたのであります。

世の苦悶懊悩し給える人々、人間の浅薄なる思慮を捨て、
仏智不思議の広大なるを仰ぎ給え。世の中の事、一として
仏の御慈悲の賜ならぬはありませぬ。私は久しき間自分が
煩悶したことを言うのを避けて居りましたが、近頃同様に

苦しめる人々が多い様でありますから、有体に懺悔して共に御慈悲を頂きて貰いたいのであります。そして私の心中は全く阿闍世王の煩悶と符節を合せたるが如く感じましたから、之を併せ叙した次第であります。

此書は昨年夏、信州飯山附近に於いて開かれた修養会に於いて、『歎異鈔』を講じたる時の解題であります。それを信友佐崎幸君が筆記して下さったのであります。故に卷末に歎異鈔を附加して置きました。是非これを熟読誦して、千古尽きざる慈悲の靈泉を味うて下さることを希望いたします。

明治三十八年五月十八日

求道学舎に於いて 近角 常観識

第一章 緒言

歎異鈔は、親鸞聖人の信仰の御話を、まのあたり聞いた人が、自分の耳の底に留まりてある響を、其儘に筆に顯わして、後の道を求めるものの為に、遣して置いて下されたもので、実に聖人の信仰を味うに就いて、大切な書物であります。その味わうというのは、講釈や理屈では一向価値の無いことである。凡そ説教を聞くにも、又聖教を読むにも、唯そのことを聞き流して仕舞って、我精神には少しも役に立たぬ。必ずこれを内心に省み、自分の身の上に照らして味わって行かねばならぬ。そも／＼宗教は実験であ

る。釈尊を初めとして各宗の祖師達、自分自身の内心の経験より、この人生の意義、即ち日暮しの上に就いての真の味を証し得て、その実験のありのままを説き教えられたものであるから、残し置かれた所の経論聖教を拝読するにも、一々自分の身の上に引き当てて、深く味わうべきは勿論である。決して道理や議論で終つてはならん。然るに年月を経るに従つて、段々と形式に流れて、大いに生氣を失うようになる。丁度清らかな水の、滾々と流れて居る川の上を落葉が掩ひ隠したり、泥土や砂礫が川の底にたまつて、遂にその流れを止むるようなもので、何れの宗派も、後代に至れば、清らかな信仰の泉が涸渇して唯形計りになつて仕舞う。その時再び偉人が出て来て、自分が人生問題に触れて種々に経験し、最後に仏陀の光明に遇つて、初めて解決がついて、生き／＼と胸中に感じ来つて、信仰の泉が湧き出したのが、新しき宗派の源である。一宗の祖師というのは、即ちこの泉を見出した人である。一の宗旨が出来たからとて、別のものが出来たのではない。久しき以前より仏陀慈愛の清泉を、新たに心の中に味わうた結果であります。

親鸞聖人は、釈迦仏以後多くの宗師の祖師達の中でも、特に要領を得てしかも誰にでも味われる、まことに人生に適切な、微妙な信仰を有して居られた。凡そ高尚な人には高尚な経験があり、学者には学者だけの経験がある。人

人各々それぞれの経験があるが、凡ての人の誰にでも通じてよく解るのが、親鸞聖人の経験である。私は京都の本願寺に参詣して、満堂の群集の中に混じて、聖人の御真影を拝する毎に、厨子の御扉が開くや否や、高いも卑いも、富めるも貧しきも、老若男女、皆一齊に感涙に咽んで礼拝するのを見て、聖人の人格に甚深の味のあることを感ぜずには居られない。聖人の御教化が、たしかに人間の心の急所要点を握つて居るのでなくては、どうしても、あ、いう訳に行くものでない。彼の琴の絃の一ヶ処を叩くと、他の絃が皆一齊に響きわたると同様に、学問智識の有無に関わらず、男女貴賤の区別なく、いやしくも人間ならば、この人生の最大要点たる或る一点を叩かれると、万人が万人みな一齊に、胸の中に微妙に響きわたる信仰である。

その最大要点というは他では無い。此人生の物事が思うにまかせぬにつけ、及び我身の罪のいかにも深重なるに驚き悲しんで、人生に於いて一のたよるべき点なきに至れるとき、大慈大悲の御仏の心は、あだかも此の如き吾人を攝取して捨てたまわぬという一事である。聖人のこの御教化を聞いては、何人も心底に感銘せずには居られぬ。此一点を仰えてまします方は親鸞聖人である。仏滅後三千年来、比類なき唯一人の御方であると、私は断言するにはばからぬのであります。

この如き聖人の実験を、心易く書き顯わしたのが此歎異鈔であるから、この鈔を講ずるといふても、これを高尚の道理の上から論ずるのではない。唯聖人の信仰の結晶としてこれを味わうのである。あだかも砂糖の塊りを嘗め味わうように、私自身がこれを味わわして貰うて喜ぶのであります。而して諸君が是れを聞いて同情同感して下さるならば、それが即ち諸君の心に仏陀の慈悲の味があじわわれたのである。

かく信仰は仏の心が直に諸君や我々の心に触れて下さった事実である故に、議論や理屈の間接なる手段にては、到底味わうことが出来ぬ。直に仏陀と接する直接の実験によりてのみ味わわれたものである。この歎異鈔の如きは此の見地に立つて拝読しなければ、恐らくは一言一句も了解することが出来ぬであらう。併しもし一たび此実験に触れたる以上は、あだかも琴の絃が共鳴するような調子だ、一言一句みなハイ／＼とうなずきて拝読することが出来る。故に私はこの聖教の文句を逐うて拝読する前に、この鈔に現われたる信仰の実験における極要点と思はるる眼目を取り出でて、各頂について実験の見地より出来得る限り申し述べて、親鸞聖人の信仰の何物たるやを味わい、そして心中に湧き出でたる嘆喟の言葉を列ねて讃嘆したいと思ひます。

第二章 罪惡と救済

古より此鈔は、親鸞聖人の信仰の極處を説破したるものとして、名高き聖教なることは誰も知るところなるが、殊に近來新らしき青年求道者の手に渡りて、一種清新なる光輝を發揮しつゝある聖教である。全体この聖教は、其文字が頗る直截簡明にして、人の肺腑を穿つが如き力あるが如く、亦その内容が頗る極端に信仰の力をあらわして居る。その言いようの、如何にも思い切つて言い放つた点は、初めて此聖教を拝読したる人は、何人も一驚を喫することであらう。而して最も何人も眼に着くは、悪人救済と云うことを、如何にも大胆に断言し去つた点である。蓋し是は、歎異鈔の特徴の第一に数えねばならぬ点であらう。蓮如上人は殊更に奥書して「無宿善の機に於いては、左右なくこれを許すべからざるものなり」と云われたも、此点のことと思われまふ。昔より子供に剃刀を持たすようなものであると、いい伝える聖教である。さりながら、かくの如く危険の断崖に迫つてあるだけ、それだけこの聖教は生きるか死ぬかのセツパ詰まつた時の救済である。平素ボンヤリして居る者の眼にこそ、頗る危険であれ、最後まで切り詰めたる求道者は、この聖教でなくては、救済の手はとどかぬ。苟も此鈔を拝読する人ならば、如何にも極端に悪人救済ということを主張してあることに、氣付かぬ人は一人もあらまい。然し眞實この悪人の救済ということが、他人のこ

とでなく自分のことであると、内心に感ずることは、頗る難いのである。そも／＼かく極端に悪人救済ということ云わねばならぬ理由は、自分が極端な悪人であるということとを、自覚したからである。その自覚もせぬのに、悪人の救済などは、少くとも自分には不必要のことである。言を換えて云えば、此鈔が、眞實自分の生命になり、光明になりて下さるには先ず極端なる罪惡觀に陥つたものでなければならぬ、ということである。成程この聖教には、悪人の救済ということが極端に書いてあるが、世人が其救済の説き方が極端であることにのみ着眼して、其罪惡それ自身が極端であるが故に、救済が此の如く極端に云いあらわしてあるのである、というところに氣がつかぬ。もつと丁寧云えば、悪人の救済ということを極端に云つてあるということとは、先ず第一に、我々の罪惡が極端に達しているということである。既にかく極端に達してあることに氣が付いて、到底自ら救うに由なく、絶体絶命であるという場合に、私はまた極端なる慈愛を以て、極端な罪惡を救ひ給う、ということである。世人が本鈔を拝読して、誤解し易き点はこの極端なる罪惡觀を起さずして、直に極端な救済に目を着けるからである。甚意地の悪い云い方なれども、これを穿つて云えば、自分は左程の悪人でもない。然るに私は極惡の人間を救ひ給うと聞いて見れば、まだ／＼もつと惡をしてよいというような氣持であるのである。それ故これ

を読んで、惡はしてもよいのじやなどという誤解が出来るのである。眞實自身で罪惡深重、煩惱熾盛のものと自覺できたならば、そのうえに惡をしてもよいのであるなどと云っている余地がある筈がない。どうしてなりとこの苦みを通れたい、どうしてなりとも助けて貰いたいのかより外は無い筈である。この如く万尋の断崖に臨んで居る吾人に對して、此歎異鈔は、極端なる救済の力を現わして下さるのである。又歎異鈔が、他人の為に危険である、人に道德を破つてもよいと勧めるかの如く心配する人もあるが、それは無用の心配である。そも／＼宗教は自分自身のことであつて、自分に対して救済が下るや否や、と云うことこそ眞の問題であれ、人の為にどうである、こうであるなど云うているのは、いらざる無駄言である。この如きことを云う人の心持は必ずさういふことであらう。自分は左程の悪人でもないが、若し他の悪人がこれを見たり、又はこれを見て惡を為したりしては悪い、という心配であらう。よくよく自分の心を押えて見れば解るが、他人は兎も角、我々はこの如く極端の救済を云うて貰わねば、自分自身の心が安まらぬのではないか。他人に對して、道德上有害無害の穿鑿などして居る余地のあるようなことでは、未だこの聖教の価値は解らぬのであらう。この如き人の心持は、自分は左程悪人でない故に、此書物はいらぬが、他の悪人がこれ

を読んで、若や平氣で悪いことをせまいかといういらざる心配である。なおもう一步進めて云えば、何人も極端なる罪惡觀の起らぬ人には、この聖教は無効である。極端なる罪惡感の起らぬ人には、危険であるや否やというまでの効力はないのである。譬えて見れば、ここに火薬がありても、未だ発火点に達するだけの温度がないならば、少しも危険でない如くで、極端な罪惡觀の点火なき時は本鈔は決して爆發をせぬのである。故に歎異鈔の中には、実に偉大なる力は籠つて居るが、罪惡觀の火の無い人には、砂も土も同様である。故に本鈔を読んだ為に、人は道德を破るなど云う危険は毫もあるべき筈は無い。もしこれを読んで、歎異鈔にこう書いてあるからと云うて、平氣で道德を破る者があれば、それは本鈔で道德を破るのではなくして、この書が無くとも充分道德を破るものである。むしろ道德を破る口実に歎異鈔を用いたというので、實際上から云えば、歎異鈔の有無は、其人の道德を破るということに何等の關係も無いのである。

これを要するに、本鈔の第一の特徴たる極端に罪惡の救済を説いてあるということは詳細に云えば、極端なる罪惡觀に對して、極端なる救済の光明が説いてあるということである。即ち親鸞聖人が、極惡最下の機の為に、極善最上の法を説くと云われたところである。さてこの極端なる罪

悪観に対して極端なる救済の光明を味わいたることは、實際実験の事実によりてお話し仕なければ到底諸君の御心に感じて戴くことは出来ぬと考える。それ故に私自身が極端なる罪惡観に陥りて救済の至極を戴いた實際を述べ、又他の人が、極端の罪惡観に陥った時に、私の経験聞いて、同様に救済の至極を戴かれたお話を致し、猶さかのぼって仏在世の時に弥陀の本願を戴いた最初の人は、また我々同様の実験を経て初めて救済せられた事実を述べ、結局親鸞聖人は、古今東西この動かすべからざる仏陀の大なる力を、自ら実験して、これを本鈔の上に示されたことをお話ししようと思う。それ故先そろ／＼私自身の懺悔から始めます。

○ ○
編者、註。

「懺悔録」の序及び緒言などは木村雄吉先生の「あとがき」にありますように、生前の常観先生の心の声でありますので、「歎異抄愚註」に載せられたものであります。

今回、先生の御晩年の著書が出版せられましたについて慈光誌にも転載させていただきました。

なを「懺悔録」は、左記書店にあります。定価六百円(二百円を發行所、京都市左京区高野泉町四〇、文明堂。

信 仰 筆 録

○大正十四年二月四日。法相横田千之助氏急逝。

おそらく自分がこの世でみた唯一の偉人に別れたものであろう。信仰が政治的人格をとった人として、日本に生れた最初の第一人。自分が生きている間にはもはやこの種の人格にはあわれまい。

病氣危篤と聞いた時には、自分も今回初めて「この人のためになら、代れるものなら」との考が浮かんだ。

六日、追悼勤行をなす。偶然和讃に「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな」唯一信頼せる政治的偉人に別れ暗くなっているところとて、初めてこの和讃の味わいを知らせていただいた。

一時の仮の星はまたかくれる。寸光もなくなった暗黒をすてぬ巨大なる光があるがたい。云々。

横田さんも自分は大人ある生命だと思っていたらう。容易に死ぬことはないと自信していたらう。我等もそんな風に考えたこともあった。けれどもそれも駄目々々。おそら

源 信 僧 都 の お 歌

よもすがら仏の道をもとむれば 我ここにぞたづねいりぬる

さとりえて思ひとく日にあひぬれば ほどなくきえぬ罪のあわ雪

人の身を露のいのちといひけるは 終には野辺におけばなりけり

月花のなさけもはではあらばこそ 常なき世にはこころとむるな

法の道しるもしらぬも渡すべし 極楽へ行く船のたよりに

古へはおのがさま／＼ありしかと おなじ山にぞ今はいりぬる

近 角 常 音

く横田さんも最後のときには、唯仏是真と仰いだであろう。我々もそうだ。

○我々の力の行き詰るのをみてやろうとの御親切——。御縁に遠ざかっていると、いつか思念が理屈ぼくなる。この頃、講話を書きだしたら、また忽ちにお慈悲の前に引き出された。これは近頃の予の心持である。これ講話を書いたまもの。——自分は一代講話書きを離れさせてはもらわれぬ。

何か知らぬが、我々の實際にいかぬのを——それは続々起ってくる——そこを見て下さるうとの思召が有難い。誰か、自分は困らぬと云い得る人は一人としてあり得ようか。暗黒がくるだけ、ます／＼捨てぬ思召しひとつが有難い。

○聞くのは自己できくのである。自己が抜けると千百信をきくのは自己できくのである。自己が抜けると千百

の説法も、ただそういう事かと、それだけの話になる。自己の問題ゆえありがたい、有難いのは自己にひびいたひびきである。これは某家で話したのと、講話を書く御縁でしらせてもらった。

「問題は自己にある。」とは今までも云ってきたが、その自己でいいのかとは今までは気づかずいた。これは予としては確かに初めて味わ、せてもらった。この時、親の慈悲の金、即ち念仏。福島県の某氏の子が学校であまりに無駄遣いしたので、父がきびしく勤当だ、出て行け！と叱った。仕方なしに出て行く子に、番頭に金をもたせてあとを追いかけてさせたという例であるが、その金とは念仏である事に気がついた。しかしこれに念仏で云おうとするのはまだ未熟なのかもしれない。親心でよいのかも知れぬ。いずれにしても問題は親心であり、それが念仏である。

○某所での所感

先ず、現時、わが国の思想界の混乱、その絶頂に達しているということ。次に、真に聞いている人は何処に行っても少ないということ。

無理想の人のかなしみ。功利主義の不徹底。結果論の大破綻。同君には本当というものが一つもないのだ。

最悪の毒な事だけれど、予はたすけまい。たすけないのが最上の子が君に対する道徳である。

○貴方の拝んでおられる仏は

許して黙っておられるのか？

仏は我々の罪惡を如実にしろしめし、それに悲憫の涙を注がれるところが、仏の仏たるところである。仏と我々の罪惡とつき合すと、そこに明瞭になるところが現れる。

仏が我々の罪惡をしろしめし、黙って捨ておくのでは仕方がない。それを捨てぬ真実が大眼目である。

○徹底してあきれざる真実

実生活の問題としては、ここが容易に気のつき難いところである。自分がかねてより言いあらわしてみたかったところ、信心はこれにきわまる。

○「かかる浅間しき身も」

歎異抄十三条に「かかる浅間しき身も本願にあいたてまつりてこそ、げにはこれ候え」とある。今さらになかされて、この一言の有難味があきらかに知らされた。

更に、仏の大客観によって、自己の小主観を打破させられるのが信仰であるということ。

大正十四年二月十四日、某氏宅にて。

○理想に囚われると、人間は妙な事になる。

一つの理想に囚われると人間は妙な結果になる。有島武郎氏の事件がよい例であり、予がいつかの変な経験等。

○姨捨山の喩についての一解釈

予は従来ずいぶん姨捨山の話をきかされてきたけれども「親が許しておいて下さる」底の信仰にとどまるときは、結局親を捨ててしまう事に結末することには気がつかなかった。

真実の親心にあうから、その不孝人が懺悔改心するにいたるのである。この真心徹到の味わいは、実にこの喩に越す喩はない。

大正十四年五月十六日、某令息葬式の夜。

○某君の問題について

何とかして助けてあげたいと思うけれど、右左について是一言の申上げる力もない。自分としては只今のところ、一言も申しあげぬ、それ以上の事はないのである。

大正十四年、五月二十五日。

○親鸞聖人の「唯五逆と謗法を除く」文釈

『銘文』の中にある右釈文は、おそらく抑止文釈として聖人の唯一のものなのだろう。注意すべきものである。

「十方一切の衆生、みなもれず往生すべしとせんとせんなり」

○親鸞聖人の「五惡趣」の釈

聖人の「五惡趣」の釈文はおそらく『唯信鈔文意』にある。唯これだけなのだろう。

「この世のひとは、無実のころのみにして、浄土をねがうひとは、いつわり、へつらいのころのみなりときこえたり。世をすつるは名のころ、利のころをさきとするゆえなり」

実におそろしい徹底言。聖人にこれまでのお示しあることには、全くびくくりするの外はない。

五惡段は、抑止文の成就文と見るべし。

○嚴父と悲母

抑止は「まことなるころなき身としるべし」の意味。信仰が徹底して、はじめて抑止のありがたいのがわかる。

わかるのは徹底後であるも、はたらくのは信前である。

即ち仰止で真実の慈悲心を知らせるのである。何やら一方嚴父がきつくあればあるほど、真実を知らせなくてはならぬようにおもわれる。詔勅があればあるだけ、大悲を説かねば詔勅の意味も完成しないかに思われる。

世間でならば、父のつよいだけ母を説けば甘やかしになる。今度の講話が詔勅がありがたくいだけるところがある。

○人間の真面目。

自分で真面目になろうとしてなるのでなしに、仏の真面目に打ち負かされて、はじめて真実のまじめがあらわれる。

これは自分が最も言ってみてみたかった経験である。

大正十四年六月一日夜。

○王法と仏法。

王法の抑止は、宗教の悲母で意味が完成する。故に「この際、宗教が悲母の働きをなさねばならぬ」これは自分の最も言いたかったところ。これにて殆んど兄上の国体観がうかがわれるようにある。人生の抑止と仏陀の救済。

大正十四年 六月六日。

『歎異鈔愚註』

あとがき

本書は亡父近角常観師の絶筆であります。この「愚註」は、昭和五年から十三年までの八年間、常観師の自家出版でありました「信界建現」誌上に四十回にわたって講述されたものです。昭和六年の晩秋、常観師が病に倒れて後の「愚註」の大半は近角・母きそ子によつて口述が筆写されました。母も昭和二十年に世を去りました。戦後の早い時期に、幾人かの方々から「愚註」の出版が切望されましたが、果たすことができず今日に至り、その方々の姿もすべて今は世になく、申し訳なく追想されます。四年前の六月一日、求道学舎記念日に、かつて大正末から昭和初頭にかけて求道学舎に起居を共にした友垣が幾十年かぶりに再会致しました。みな古稀を越えた老顔を見合つた次第です。その折に、どうしても、師父の「歎異鈔愚註」だけは一卷の書として世に遣し、散佚を防ぎたいという願いが全員の胸に湧いてまいりました。こうして、「愚註」出版の具体化のことが始つた次第です。爾来、在京の

○我々の行詰りを捨てられぬ真実に生きる味わい。今眼前に自分の行詰りを同情される。その同情がいかにも意外の同情であるのである。

何かわかつて安心することかと思つたら、わからぬのを実際にすてられぬ本願の仰せがえらいことであつたのである。この事を話しながら、実に意外の事に感じた。

○聖徳太子の篤敬三宝の精神。

「三宝の慈悲」憲章第二条の精神は、四生の衆、万国の極宗を教えられたものである味わいは今度初めて知らされた。鉄案一決、万古動かぬのである。二条は実に著しい章である。悲しい哉、自分にはこれだけの自信が乏しかった。

○現生十種の益。

横に五趣八難を超え、現生に必ず十種の益を得るなり。

- 一、冥衆護持。
- 二、至徳具足。
- 三、転悪成善。
- 四、諸仏護念。
- 五、諸仏称讃。
- 六、心光常護。
- 七、心多歡喜。
- 八、知恩報徳。
- 九、常行大悲。
- 十、入正定聚。

ことに今度は、至徳具足をありがたくいただいた。

木村雄吉

同朋が隔月に寄り合い、義兄近角真観氏を中心に残存した「愚註」旧稿のゼロックスを手にして読み合つてまいりました。この間にも、これら面授の同朋の中にも変化が起きずには経過しませんでした。三人はすでに世を去り、四人は病後静養の日々を送っている次第です。しみじみと火宅無常の世界を実見せしめられる次第です。

本文の直後に付録した「歎異鈔」の形式には驚かれるかと思ひます。これは旧第二高等学校長であつた故阿刀田令造先生が仙台において主宰した「仙台求道会」で用いられた講本の形式であります。歎異鈔の前九条は十一條以下の条々にそれぞれ照応して信仰上の異義を正すという内面的構成にあるという「わが師近角常観先生の御見解に拠り前後照応の体裁を採りました。之は全く原著と異なるものであります」と、講本編輯の後記に読まれます。師父常観はこの講本を手にして「前後照応歎異抄」と称してほほえんでいた姿が目に見えます。阿刀田先生は明治三十五年に創始

された求道学舎の第一回の最初の入舎生でありました。

本書を印刷に付するについての原稿は、篤信の人、故能瀬茂人氏の手になるものであります。同氏は「信界建現」の一枚々々から「愚註」の項を原稿用紙に浄書し、さらに御自分の覚えにと、引用聖典の典拠その他のメモを克明に註記されていました。私どもでの相談の結果、原稿そのままを印刷に付することとしました。原文はすべて旧かなづかいでありましたが、戦後の読者のことも考え、新かなづかいに訂正致しました。ただし、古聖典からの引用は、むしろ旧かなのままに止めました。本書の出版を同氏の生前に果し得なかったことを深く悔みます。一本を御霊前に捧げる次第であります。

次に付録しました旧著「懺悔録」の「序」および「緒言」は、私どもにとつては、まざまざと生前の師父その人に対する面しつづあるの憶いがあります。読者にも師父常観の心の声をおとけしたいと願った次第であります。

末尾の「近角常観の生涯」は「東京本願寺報」第九九号に掲載された拙文です。私の眼底にとどまる師父常観の姿であります。

「愚註」の終りに近づいて師父は言う「過去十数年に於て宗教界に於ける諸問題の起りたるとき、止むを得ず起ちて、意見を陳述したる際、何時も歎異抄の此文句を思い出

して感慨に耽った」と、「此文句」とは「露命わづかに枯草の身にかかりて云云」の行文です。現下の宗教界における諸問題を師父常観は霊界からみそなわしていることと確信する次第であります。そして私の胸には師父の「観世音菩薩賛」のかの一節が浮んでまいります。

霊界冥々不可測 自然法爾義無義
渺兮蒼海之一粟 凡小何為知仏意
山間忽落花一輪 長江万里水上浮
飄然去來到彼岸 人生百年光悠悠

この「あとがき」はもともと義兄真観氏が執筆するはずであつたところ、はからずも同氏は病を得て静養に努めておりますことのために、やむを得ず拙文をつらねることにになりましたことを御許し願わなければなりません。

終りに本書の出版を快諾され、いろいろの御援助を惜まなかつた山喜房仏書林主人浅地康平氏に心からの感謝致します。（註・本書発行六月の三ヶ月前、真観氏逝去さる）

昭和五十六年五月 求道学舎にて

○ ○

慈光社

御紹介 近角常観著。

歎異抄愚註 近角常観著。
發行所 東京都文京区本郷五―二八―四 山喜房仏書林
振替 東京 ○―一九〇〇番 定価八五〇〇円。

御一代記聞書抄 (続・二二)

蓮如上人、兼縁に物を下され候ふを、冥加なきと御辞退候ひければ、仰せられ候。遣はされ候ふ物をばただ取りて信をよく取れ、信なくば冥加なきとて仏の物を受けぬやうなるも、それは曲もなき事なり、我すると思ふかと。皆御用なり、何事か御用に漏るることや候ふべき。と仰せられ候ふと云々（第三二四条）

本条で語られているのは、あるとき蓮如上人が御子兼縁に物を下さった。それは衣服の類を賜ったのであろうと解釈されています。それに対して兼縁公が遠慮して、これは冥加に尽きますと御辞退したのです。それに対して蓮如上人が与えたものは素直に有難く頂戴して「信をよく取れ」と申されたのです。信なき心で冥加に尽きると辞退してみても、それは結局、人間的な遠慮気兼ということになって

井 上 善右エ門

しまつて、却つて相手の心を無にする結果となる。「曲もなき」というのは当時の言葉使用で、人の言う事を取りあわず相手にせぬ意に用いられたようです。
「我するとおもふか」とは、ここの「我」とは蓮如上人御自身をいわれているのです。即ち我れが汝に与えるとも思っているのか。そうではないぞ、如来聖人の御用物を取り次いで与えるまでであるから、有難く素直に頂いて信を取れ、信を取るにまさる大切なことはないと申されたのです。

そしてさらに、何事も皆御用である。如来の仏物でないものはない。それを我物顔にするとところに、人間の勝手な振舞いの誤りが生じるのであると、誠めを結ばれているのであります。

二

人間は自分勝手な世界に住んでいるものです。勝手な世

界とは人間自身は気づかぬのですが、人間の意識には真実に一致せぬ性質があつて、その性質から画き出している世界に住んでいるということです。しかも人間はそれを当然の事と思ひ込んでいますから、そこにいろいろと厄介な問題や煩らいが起ります。

人間の意識の性質を維摩経には、「痴あれば愛あり、愛あれば病あり」と語っています。痴とは真実になわぬ愚かさです。愛とは愛着するものになるのは、自己と自己の所有物でありまして、その所有物には事物はもとより、才能も能力も知識もすべて我れに所属するものが含まれます。これを我・我所と仏教では教えています。病ありとは心の幻想に悩む病いです。

何としても人間は、自分から作つて自から悩むこの病から脱して、真実の光の中に住む身とならねばなりません。

日常生活の中でも遠慮や気兼ねといった心の葛藤が始終あります。なかなかさりとした秋空のような胸の中にはなりえぬものですが、よくよく考えてみると、ここにも何か執らわれた勝手な思ひがあつて、そこに煩ひが起つてゐるではありませんか。

それに対して素直というのは実に気持のよいものであり、また美しいものです。この素直さにはどうすれば道が開けましようか。素直さは円やかで無用な角がありません。そ

してさりとした明るさがあります。さらに素直さには相手の心を十分に受取っている豊かさが感じられます。子供が素直であるというのは多く単純さにもとづくもので、それはまだ本当の素直さとは言えません。

三

我々が真実からはみ出して勝手な生き方をしている事に、いささか気づくようになって、なかなか我が心は思うようにはなりません。真実になうように努力してみても、我が心の無力をいよいよ感じるのみです。

自己中心的な我が思ひを転換せしめて、法の真実に自から方向づけて下さるものは本願力一つであります。大悲の信に恵まれる不思議な仏徳が然らしめて下さるのであります。

我と我所にもとづく発想が転じられて、天地自然の恵みを感じるようになり、それがやがて仏物として信に映じてきます。そして如来の御用の中に生きているという自覚に立帰ったとき、実相になつたまことの生活が顕現するであります。物を大切にするとすることは、宗教的開眼によつて本當に末徹つたものとなるのです。

二九七条に「仏の物と思召し候へば、御自身の召物まで

蓮如上人のお歌

かきとむる ふでのあとこそ あはれなれ ながらんの
ちの かたみともなれ

かきとむる ふみのことばに のこりけり むかしがた
りは きのふけふにて

あつき日に ながるるあせは なみだかな かきおくふ
での あとぞおかしき

ひとたびも ほとけをたのむ ころこそ まことの
りに かなふみちなれ

つみふかく 如来をたのむ 身になれば のりのちから
に 西へこそゆけ

法をきく みちにころの さだまれば 南無阿弥陀仏
と となへこそすれ

御足に当り候へば御頂き候」とあり、三〇八条には「紙切の落ちて候ひつるを御覧ぜられ、仏法領の物をあだにするかやと仰せられて、両手にて御頂き候ふ」とあるのも情と意が信において一つに融けた上人の自然なる生活の御姿であります。

さてまた上人が辞退する兼縁公に「遣はされ候ふ物をばただ取りて信をよく取れ」と申された言葉を深く味わてみなければなりません。何事も仏物であれば、遣わされたものを素直に頂戴して信の世界に生きるようにせよと申されているのですが、それは同時に裏からいうと、信の世界に働いて下さる本願力に身を任して生きると、真実に一致せぬ人間の意識が転じられ、無駄な遠慮や気兼ねが散じられて、自ずと素直の明るさが恵まれてくることを示され、真実の生活の尊さを教えられたものと拝されるのであります。

聞書を自照誌より引続き前後七十二回拝読させていただきましたが、本号を以て一応終了させていただきます。拙ない講讃をお読みいただいた諸兄姉に厚く御礼を申し上げます。 合掌

昭和五十六年、七月十二日稿了

凡骨日誌抄 (12)

——真宗者のねがい——

西 元 宗 助

敬愛する藤岡崇信氏（熊本・真光寺住職）から、「信教の自由と靖国神社問題」——真宗者のねがいが届く。

その要旨は、浄土真宗の信心の立場から、靖国神社国営化反対を、親切に述べたもので、一読して敬意を表する。私のように宗教教育に関心をもつもの、そしてそのため特に明治以降の、わが国の教育と宗教との関係を研究してきたものは、戦前の歴代政府が、神社を国教扱いにするために神社は宗教に非ずと強弁してきたことが、どんなに国民の純な宗教心をそこなってきたか、そして如何に神道のもの（大事な宗教性をも歪（ゆが）めてきたか、それは測り知れぬものがあると痛感している。それだけに、藤岡さんの文書に深く共鳴する。

しかし、このようなことを述べても、護国の英霊を祀る靖国神社問題は別で、この神社こそ国家が経営すべきではないか。それが国民感情ではないかと、主張する方も多からう。いや真宗の門徒の中にもあるう。しかし、それだけ

は、戦没者追悼の法要を営まれるという。これはまことに有難い。

以上、前記藤岡氏の小冊子に就いて述べた。じつは、藤岡氏の龍谷大学在学時代、わたしは時の学長森川智徳先生の懇請に応じて、昭和二十八年のころから数年間、週に一回、龍大に教育学の講義に赴いていた。しかもそのころ、龍大生と京都女子大の有志による龍門会という真摯な聞法の会もあって、君はその幹事であった。その会にも私はしばしば招かれ、そのご縁もあって、そのころの卒業生とは親しい。しかもそれらの諸君は今や四十代から五十代にかけての中堅住職で、その一人が藤岡君である。その藤岡君（「氏」とあまり書くとは水臭いと叱られるので「君」に変更）からのたよりによると、この靖国神社国営反対運動を始めてから、門徒の中には法座に参らなくなつたものもいて、風あたりがきつという。それで私は、あまり無理するなと慰問すると共に、この秋には久振りに参上する旨返書しておいた。

わたしはお参りさせていただいたならば、従来よりもさらに懇切に、ただ念仏の他力信心の世界を讃嘆させていただきたい。そしてそのことを通じて、神社問題について、われらの真の気持ちを披瀝したい。それは必ずや、八百萬

に問題であつて、信教の自由ということからいっても、殊に他力の信心を明確にするためにも、決して神道の国教化につらなるような戦前の過誤を再びくりかえしてはならないのである。

もし護国の戦死者を弔うためであれば、それこそ戦後、国家の施設として、憲法の精神に添い、東京都の皇居（宮城）のお濠に隣して築造された「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」において営まれるべきではないか。これは靖国神社よりは敷地、規模、はるかに大きく、寺院や神社の形式をとらず、六角堂の御堂が中心で「その地下に現在、三十二万体の無名の戦没者の遺骨が納められ」（藤岡氏の冊子から）ているのである。ここにおいてこそ、国民は、それぞれの宗旨によつて、神道のものは神式で、仏教のものは仏式で、キリスト教のものはキリスト教式で、追弔法会を行うことができる。げんに、藤岡氏の文書の伝えるところでは、この墓苑にて今後、春秋の彼岸会の前後に、西本願寺の門主

の神々の讃嘆し給うであろうことを深く信じてやまないから。

本誌の六月号に、故山本晋道師のお名前を見出して驚く。わたしは山本師を存じあげたのは、末弟文平の長崎高等商業（旧制）在学時代、その高商仏教育年会の指導者が山本晋（すすむ）先生であられたからで、そのご縁で、当時（昭和十年のころ）長崎県諫早で発行されていた師の個人雑誌『畢竟依』を、私も送っていたのだ。

師はその後、梅原真隆師の門下となり得度して晋道といわれたが、戦争中の激しい生活のためか、早世されたのは甚だ惜しまれる。末弟は山本師から非常な感化をうけたようであるとき、この弟（ある会社の取締役）、気焰をあげて、「会社の経営は、大無量寿経の十八願、いや、教行信証の第十八願でいく。兄さん、わかるか」というので、この私、目を白黒させたことであります。

六月下旬、仏光寺本山の別室での、安田理深師中心の「大地の会」（四日間連続）に、半日、出席聴講させていた。全国から百二、三十名の出席。顔ぶれを見ると、大派の若手の僧侶を中心に、本派からも仏光寺派からも。それに久々に松原祐善師に会えたのも嬉しい。

この日の安田師の約二時間余にわたるご講話の中で身に沁みしたのは、「人身受けがたし今すでに受く、仏法聞きがたし今までに聞く」とあるように、人間に生れた喜びは、人間に生れたからこそ、仏法の聞ける喜びの与えられたということ、この聞、この信を含んだ聞ということが大事とそれから、色々とご講釈があつて最後に、如来は、われらに對して、一切注文をつけない、ソノママデヨイと、大悲して招喚したまうと。そのお言葉を承つていて、思はずジーンとなった。安田理深師、本年たしか八十三才。わが婿殿と共に作札而去する。

○ ○ ○
無相さん、再入院のこと、岡崎の一道会にて花田正夫先生から承つて案じましたが、危機を脱して、あるいは近くご退院かもとの便り。

その無相さんが、その昔、十六年間、教えを仰がれた滋賀県蒲生町の源通寺の禿和尚、この和上さんのことは、無相さんの念仏詩に時折、影現なさるが、その源通寺から遠くない日野町での公開講座で、無相さんの、
わたしの信心
雪ダルマ
おテントさま　でりや
すぐとける

念仏詩抄

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
御廻向の信

香師おおせに

”お助けのおこころ

聞くよりほかに

信心の得ようはない――”

お助けのおこころ

六字のおこころ

ソレ聞こゆるが

ご廻向の信――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

香師―香樹院徳龍師

おテントさまが
ご信心
の詩を紹介いたしましたら、なんと源通寺の老奥さん、それに当主の若ご住職も参会してあられたこと、あとで知って、ご挨拶しそなたのことを悔むことでありました。

○
もう一筆、あるお寺さまの掛軸に、みごとな筆跡で、
「み仏、ことばとなりて、われを救い給う」(聴磨)
とありました。有難いので、記しておく。

(昭五六・七・二日)



大慈の心
大悲の心
木村無相

六字の番号

香師おおせに

”南無とタノムばかりで

阿弥陀仏が必ず助くるぞと

御満足の六字の番号じゃ”

御成就なされて

如来さま御満足――

ただかされて

わたしは満ブク――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

不思議

香師おおせに
“生きながら
角（つの）の生えぬも
不思議なり”

顔も（樹木）も（お）

カタチも

人間なれど

——

香師——香師おおせに

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

信心

香師おおせに

“聞くとは

ナニを聞くのじゃ

常に称える

念仏のイワレ——”

“弥陀の名号となえつつ”

そのオイワレが

聞こゆるが信——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

六宅の香

帰命無量寿如来

香師おおせに

“拝まれたもうは

大悲の如来——

拝むところは

大悲のお與え——”

ああ

大悲、

帰命無量寿如来——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

善知識の御化導は

香師おおせに

“善知識の御化導は

暗夜の燈明——”

暗夜の明燈

ただ一燈

“ただ念仏して

弥陀に助けられ

まいらすべし”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

雪と墨（すみ）

香師おおせに

“一文不通の尼入道の

信を得て喜ぶ心と

千万巻の書物を読んだ

僧分の心とは

雪と墨ほどちごうておる”

信得た人の喜びと

解っただけのモノシリとは

雪と墨ほどちがうのか

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

法然聖人の徳音

花 田 正 夫

私共が人と交るとき、多くは外面だけに接して、心と心のとけあうということは実にむづかしい、しかしそこまではないかと、肝胆あい照らす真の交りとはいえない。

ことに私共の生命である信仰の上においては、開祖や祖師方の真心（まこと）（ころ）が、私共の胸奥に徹するといふことがなければ、信心の確立は出来ない。

今、浄土門の開祖としての法然上人を仰ぐとき、ただその御伝記とか、著述とか、感化力とかを外面から眺めて感心するといふだけであれば、素見の客、見物人にすぎない。私共はどうしても元祖に直面しなければならぬ。

さてその道は！もとより八百年の昔、すでに温容は寂滅の煙と化し、德音は無常の風に障えられて居るけれども、幸に実語は録されて現にのこされている。我等、のちに生れし者の幸慶（じあわせ）には、実語をとおして元祖の玄意を聞くことが出来る。仏陀がかねて「色身は減すといえども法身は常住なり」とお説き下されたことのありがたさ

がここにもうかがわれる。

さて元祖の御生涯を貫ぬいての御勸化は「南無阿弥陀仏」ひとつである。「選択本願の念仏」である。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の一句である。

その御目標（おめあて）は、一切善悪の凡夫である。そこに一切人類の救済の道を広開せられたのである。このことを元祖は我御身にひきあてて、

「我はこれ烏帽子（えぼうし）もきざる男なり。十悪の法然房、愚痴の法然房が、念仏して往生せん云々」と常にくりかえして仰せられた。

私共は幸に、日域大乘相応（にちいきだいじょうそうおう）の地に生れ、高僧、知識の恩沢（おんたく）を蒙り、目に耳に口に南無阿弥陀仏に常に触れ得る環境を恵まれている。

然し同じ念仏であるが、聞く人、称する人の心が熟していないと、それ／＼勝手な、我流の判断で念仏の評価をし

ていて、聖人のお勧め下さる本意はとりおとされて、そのまま埋もれてしまふ。

私共はまず虚心担懷（きんたんわい）によきひと元祖の仰せを聞かねばならぬ。そうさえすれば、元祖の真意は私共の身心をおのずから満ち足らわして下さる。

しかし、おのれを空しうするということは難事である。

私共はつねに、俺がという我執（がしやく）がつきまとうて、自我の殻（から）にこもって一切を裁き、我は是なり、正なりときめ、自己に反するものはすべて邪（よこしま）であり、悪であり、敵であるときめている。この我執我慢は根強く、しつこく私共を左右している。盤珪（ばんき）禪師は「不生仏心」を説いて「身びいきする心」が迷いの根本であると生涯くりかえしまきかえし誡められている。我々はその我執我慢の迷雲に深く塞（ふさ）ざされて心の眼はとこしなえに盲（め）しいている。

こうした心から、我々は念仏を称えながら、聞きながら自分の知恵や才覚（さいかく）（さいかく）でそれをもてあそんでいるにすぎない。そしてお説き下さる真心（まこと）（ころ）には何時までも触れることが出来ない。維摩経には「強剛難化（きょうこうなんけ）の衆生」と、この我執・我慢の塊（かたまり）とも云うべき私共を大喝していられる。

嗚呼（ああ）しかし、このどうしてみようもない、強剛難化の我我の上にこそ、元祖は選択本願の念仏を、生命を賭してお

勧め下さる。流罪、死罪をも越えてお勧め下さる。この只事ならぬ大悲のまことに触れては、自己のあさましさを一分一厘の未練もなく投げ出して、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と喜ばせて頂くばかりである。自分の愚鈍さもあさましさもかねてしろしめす大悲の南無阿弥陀仏の一つで万事がことたりるのである。

元祖上人の御一代の德音は、南無阿弥陀仏一つである。しかもその念仏は「たとい死刑に処せられようと念仏の一義はとどむべからず」と世間にはばかり西阿房を大喝して居られる。又「たとい肩をならべ膝をまじえてくらすとも、念仏のないうところ千里万里のへだたりがある」と語られている。

更に御往生の近い日「御廟所を如何ように」とおたずね申すお弟子方に「廟所を一所にとどむべからず、たとい賤（しず）が苦屋（くるや）（とまや）であらうとも、念仏のあるところそこが廟所である」と仰せられ、念仏の息絶えおわられている。

俱胝（くぢ）の一指頭の禪は、切っても切れぬ指であった。法然上人の念仏もまた死罪流罪でとどめ得ない念仏であった。尽未来際（じんみらいさい）かけて盤石不動の南無阿弥陀仏であった。そこに上人の真面目は存する。

あとがき

夏中御見舞申し上げます。さて今回、近角常観先生の「歎異抄愚註」が出版されましたので、同書に載せられました「懺悔録」の序と緒言を転載させて頂きました。これは明治三十八年に信州飯山で先生が最初に歎異抄を讃仰された時の筆録であります。又、求道学舎の木村雄吉先生の同書のあとがきも転載させて頂きました。

八月は近角常音先生の御忌月にあたりますので、先月に続けて信仰筆録を頂きました。先生の「求道不止」のお姿に接し、我が身の懈怠を愧じ入っております。

井上様は、御一代記聞書が続けて讃仰して下さいましたが本号で筆を止められ、次から新しい原稿を頂けることになりました。聞書は蓮師の信の歩みがそのまま具体的に記されて、手を執ってお導きを頂けるもので座右において拝読させて頂きましよう。

西元様は、東奔西走寧日もない中から、早にお原稿を頂きました。その中の藤岡さん

との文通に、最近喧しい靖国神社問題の所見の一端をうかがいました。このことはいずれ後日に詳述下さることを期待しております。

七月十八日の木村さんのおたよりに、「私のからだについては、持病の狭心症のほかに今回は心筋硬塞の併合でありましたが、六月二十八日退院の予定でございましたが、その手当を受けております。この暑さですから病院で静養させて頂いて有難いことであります」とあり、朱書きで「まだ電話かけと歩くのは禁じられていますが、大分よろしいです」と書き添えてありました。

○

終戦以来、岩壁に立つて、一人息子の帰還を待ち続け、岩壁の母と歌われた端野いせさんは、去る七月一日に八十一歳で逝去。ところが七月十三日に、中国の女医さんに托して、黒いケースに納めた小刀が届けられて、息子の新二さんの生存が知らされた由であります。三十六年間、待ちに待った岩壁の母を憶うにつけ、西方岸上に久遠このかた一心正念直来（オネガイダカラスグキテオクレヨ）と待ちに待たれる弥陀仏を想い、お念仏のほかはありませんでした。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駄上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三

筋目、角

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

（但し日曜を除く）尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 八〇〇円（送共）
一年 一六〇〇円（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 坂部光雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七